

キリスト教一致祈禱週間・東京集会メッセージ

東京カテドラル聖マリア大聖堂

日本キリスト教協議会議長 吉高叶

本日、このようにしてキリスト教一致祈禱週間をおぼえる礼拝を、教派・教会を越えて結び合わせ、共に捧げられる幸いを心より感謝いたします。今回の式文は、アルメニア・カトリック教会と福音派諸教会が共同で作成してくださったものです。キリスト教の最も古い伝統性に根差しながら、他方、今日の苦しみに満ちた世界への執り成しの祈り、と、多くの要素を念頭において作成されています。そうした対話と祈りの作業に感謝しつつ、今日、ここにある諸教会も対話と共なる祈りへと導かれながら、この礼拝に最後まで携わってまいりたいと思います。

さて、いま、直前には『ヨハネによる福音書』から 12 章 30-36 節の、主イエスがご自身に迫る重大な時のことについて弟子たちに語った言葉を朗読しました。主イエスが「ヨハネ福音書」においてご自身を語られる際の特徴的なフレーズが、「わたしは〇〇である」と語る表現方法です。「わたしが命のパンである。わたしが生きた水である。わたしは世の光である。わたしは羊の門。わたしは良い羊飼ひ。わたしは道であり、真理であり、命である。わたしは復活であり、命である。わたしはまことのぶどうの木。」などと語られます。

これらは、「ヨハネ福音書」を読んで共に生きていた群れ(ヨハネ共同体)が、自らの生き方を見つめようとした際の「軸足」をイエス・キリストに強く据えて、イエス・キリストこそが「わたしは〇〇である」と仰られる方なのであり、自分たちは、そのイエスに従い、イエスに繋がり、イエスに養われるいのちであることを明確にしようとしたからです。

ヨハネ共同体が、そのことを強く望んだのは、彼ら・彼女らの時代がドミティアヌス帝ローマによる厳しい支配の世界だったからです。皇帝ドミティアヌスは、それまでの歴代皇帝以上にローマ軍を増強・整備し、元老院を軽視し、権力の集権化を図り、反対勢力を反逆罪で次々と粛正、密告制度を奨励した恐怖支配の時代です。忠誠を表明する態度が常時求められ、疑心暗鬼がお互いにの上に膜をつくる息苦しい時代でした。そしてローマ皇帝は民衆に自身のことを(Dominus et Deus)「主にして神」と呼ばせていました。「わたしこそ真理であり」「わたしこそ平和をもたらす光であり」「わたしこそ人々の生命の『生殺与奪』の権能者である」「もし生きたければ、わたしに従え」と号令し、皇帝崇拝の神殿を各都市に次々と建立させていました。朗読文の最初に「この世の支配者」と出てきますが、まさにこの世の支配者によって、この世は暗闇に閉ざされている。いのちが、真理が、交わりが、黒塗りにされている。そのような時代でした。

そのような世界を生きながら、ヨハネ共同体クリスチャンたちは「真のいのち」を求めました。彼ら・彼女らは「真の光」を求めました。そして見いだしたのです。イエス・キリスト、この方こそ復活であり、真理であり、いのちであり、光である、と。

こんな暗い時代、皇帝がいのちを黒塗りしていく時代の中にあって、わたしたちは、イエス・キリスト、この「光」と出会うことができた。この「光」の中を歩むことができる。そしてわたしたちもまた「光の子」として生きることができる。イエス・キリストにつながっていよう。それがヨハネ共同体の人々の信仰であり希望だったのである。

2026年、私たちが生きているこの時代の世界もまた、この世の支配者たちによって暴力的揺さぶりを受け、世界中が分断状態に追い込まれています。ロシアによるウクライナ侵攻は出口の見えない戦争となり、イスラエルによるガザへのジェノサイドは悪魔的で、アメリカによるベネズエラへの攻撃、グリーンランド占領の策動など、帝国主義的な侵略が大手を振っています。乱暴で、独善的で、下品で、きまぐれな態度が世界を闊歩しています。そこでは、命は数として語られ、「正義」は陣営ごとに別の意味を持って主張され、その普遍的意味を失い、「おまえは味方か、さもなくば敵」という二項対立が国々・人々を脅迫支配しています。そしてこの分断と混沌は、わたしたちの身近な社会、地域、職場、家庭、さらには教会の中にまで影響を与えてきています。こうした時代にあって、教会は何を信じ、どう生きるように招かれているのでしょうか。

パウロは獄中からエフェソの教会に向かってこう語ります。「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさしわしいく歩み」なさい（4章1節）。

ここでパウロが語る「招き」とは、何かことさらに特別なミッション・崇高な使命のことではありません。それは、とてもシンプルに、「誰もが、キリストによって呼び集められた者として生きること」そのものです。パウロは、その歩みの具体的な姿をこう続けます。「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。」（2-3節）ということです。ここには、今日わたしたちが日々見せつけられ辟易としている「力(パワー)による一致」は見つかりません。相手を打ち負かすことで成立するような「平和」もありません。ここにあるのは、弱さを引き受け合うところで生じる「共感に基づく一致」、「希望を抱いて耐え忍ぶこと」によって保たれる共生と平和です。

パウロは、教会の一致を支える根拠を、「一つ」という言葉を連続させて語ります。「からだは一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが一つの希望にあずかるように招かれているのと同じです。主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ。すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。」（4～6節）ここで重要なのは、「一致」について、パウロは人間が懸命に努力をして作り出す状態を示そうとはしておらず、「一つ」とは、神によってもたらされ、神によってすでに与えられている現実だと伝えてくれていることです。

私たちが「一致」しようとするのは、同じ意見を持たねば「おぼつかないから」と

いう私たちの必要からではなく、私たちは、そもそも同じ神に呼ばれ、同じ主に結ばれ、同じ霊によって生かされているからなのです。教派の違い、礼拝・礼典形式の違い、神学的理解の違いは私たちの間に確かに存在します。しかし、それらは「わたしたちは決して一つでないことの証明」ではありませんし、私たちが決して一つになり得ない理由でもありません。一つとされている神の現実の中で、実際に存在してきたわたしたちの「歴史的な姿」以上のものではないと思います。ですから、わたしたちは、いつでも「一致」に対する招きを、いつでも、どこからでも聞いていいし、動き出していいのです。今回の式文のテーマ解説の一文には次のようにあります。「霊的成熟とは、教義的な正確さを追求するのと同じ熱意をもって、一致を追い求めつつ、互いの違いを受け入れることです。」 ぜひ、そうありたいと思わされます。

世界が暴力によって秩序を保とうとするとき、そこでも「一致」は振りかざされます。そのような「一致」は、たいがい脅迫や排除や同調圧力によって達成されます。しかし、キリストの教会が招かれている「一致」は、まったく逆です。「一致のための強く勇ましいパワー」にまったく依存せず、ただただ、高ぶらず、敵を作ろうとはせず、勝者になることを喜ばず、弱者を切り捨てたり置き去りにしない道、そのような歩みへの招きです。その道を主イエスが歩みました。私たちを一つとすることを祈りながら。十字架にかけられたキリストは、当時の力ある支配者の中にはなく、「人々の分断」と「弱者いけにえ」の人間社会のただ中で、ご自身の命を、その分断の裂け目に、弱者の痛みの中に差し出された方でした。それがわたしたちを招いているひとりの主の姿です。

だからこそ今、わたしたちすべての教会は、教派の違いを違いとしながらも、「一つの体」として共に歩むことへと、改めて招かれています。

パウロは言います。「霊による一致を保つように努めなさい」。

「一致は、神がすでに与えてくださった現実である」ということは、まさしく私たちの希望です。ただし、私たちの「一致」は、放っておけば保たれるものではなく、対話をやめず、相手の弱さを引き受け、自分の弱さを認めて伝え、それでも理解できない違いを抱えたまま、共に歩み続ける努力が求められる歩みです。それは決して効率的な道ではありませんが、その不器用な歩みの中にこそ、この世界が知らない平和のしるしが宿るのだと信じるのです。人間の合理性は、人間の効率性は、とにかく神の国を見失うのですから。

みなさん、暴力と分断が当たり前のように受け入れられているこの時代に、教会は「一つの主」「一つの希望」「一つの神」に生かされている共同体として、「別の生き方」が可能であることを証しするように招かれています。謙遜と柔和と忍耐をもって、また愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなによって結ばれたネットワークとして、その歩みを、ここから新たに始めていきましょう。

2026.1.18.